

✿ パネル展「京都岡崎の文化的景観」

文化遺産部景観研究室では、京都市文化財保護課と共同で、2010年度から東山山麓の琵琶湖疏水が流れる岡崎地域を対象に、国の重要文化的景観選定に向けた調査を実施しています。その調査成果の報告展として、パネル展「京都岡崎の文化的景観」を2012年3月13日から22日の期間、細見美術館(京都市左京区岡崎最勝寺町)で開催しました。

現在の岡崎は、美術館や図書館が集まる文教地区としてのイメージが強いですが、時代をさかのぼると、明治23年(1890)の琵琶湖疏水開削を機に、舟運、水車、水力発電による工業地開発、博覧会開催と跡地整備による岡崎公園の誕生、疏水庭園群からなる別荘地開発等、京都の近代化を象徴する土地でした。さらには、江戸時代には聖護院蕪等の京野菜の一大産地、平安時代末期には六勝寺や院御所等の院政政治の中心地でもありました。ダイナミックに都市の姿を変え続けてきた岡崎ですが、時代を超えて岡崎の地を一つのまとまった形で捉えたとしたら、どのような見方がありうるのでしょうか。

本パネル展では、「文化的景観」として岡崎の地を読み直すことを試みました。これは、現在の景観を目に見える眺めだけでなく、脈々と連なる歴史の中で、人々の暮らしと風土の間に生まれた景観を形作る仕組みから捉え直す試みです。展示内容は、「自然」、「歴史」、「生活・生業」の3つの視点から、文化的景観としての岡崎の読み解き方や、「疏水庭園と生態系」、「夷川ダムと水車利用」等をテーマにしたもので、写真、映像、イラスト図面等を交えて解説しました。

この展示を通して、岡崎の文化的景観の保護と、岡崎地域の将来像について考えるきっかけとなれば幸いです。
(文化遺産部 松本 将一郎)



展示会場の様子(会場からは東山と岡崎公園が望まれる)